

# 「シリーズ：天文学者たちの昭和」10周年



## 高橋慶太郎

〈熊本大学大学院先端科学研究部 〒860-8555 熊本県熊本市中央区黒髪 2-39-1〉

e-mail: keitaro@kumamoto-u.ac.jp

筆者はこれまで退職された天文学者の方々へのインタビューを行ってきており、20世紀後半の天文学の発展だけでなく教育や社会の変化についても詳しく伺ってきました。そしてその内容を10年間にわたって「シリーズ：天文学者たちの昭和」として天文月報に掲載してきました。幸い、読者の皆さんの好評を得ることができ、長く続けてこられました。本稿では連載開始10周年を記念して、改めてこの活動はどういうものなのか、その目的や意義、プロセスを説明します。そして話者の方々の証言からどのような歴史を紡いでいけるのか、展望いたします。

## 1. シリーズ：天文学者たちの昭和

筆者は天文学のオーラルヒストリー、つまり退職された天文学者の方々へのインタビューを行い、その記事を「シリーズ：天文学者たちの昭和」としてこれまで10年間にわたって掲載してきました。具体的には以下の通りです（敬称略）。

- ・古在由秀（2015年・全5回）
- ・西村 純（2016年・全5回）
- ・川口市郎（2017年・全3回）
- ・杉本大一郎（2018年・全5回）
- ・小暮智一（2019年・全5回）
- ・海部宣男（2020年・全13回）
- ・小平桂一（2021年・全12回）
- ・佐藤文隆（2023年・全12回）
- ・日江井榮二郎（2025年・全11回）

幸い、これらの記事は読者の皆さんに好評をいただいております。連載前は、このような記事はシニアの方々には懐かしんで読んでもらえるとしても、若い方々の興味はあまり惹かないのではないかと思っていました。しかし年会や研究会などで院生

の方から声をかけてもらったり、様々な方からメールをいただいたりして、思いの外多くの方に読んでもらえていることがわかって喜んでます。

インタビュー自体は2012年から始めました。これまで行ったインタビューは上記の方々を含め、23名、合計150回にも及びます。本稿ではシリーズ10周年として、この活動について少し詳しく紹介したいと思います。

## 2. オーラルヒストリーとは

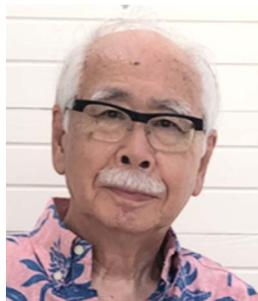
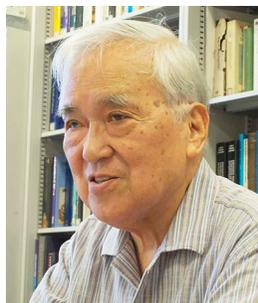
オーラルヒストリーとは、歴史的出来事の当事者に直接お話を伺って記録を残す手法で、人の経験や記憶をアーカイブする活動ということもできます。公的資料に残らない事実を聞けたり、よく知られた事実でもその背景やニュアンスを知ることができたりする点がオーラルヒストリーの醍醐味です。また、その人のものの見方や考え方を知ること、当時の時代背景や社会を探る手がかりとすることもできます。特に、同時代を生きた複数の人たち、1つの出来事に様々な立場関わった人たちのお話を総合することで、物事を多面的に見ることができます。まさに多波長天文学史で

す。さらに公的資料や文献、歴史的建造物や物品などを組み合わせることで、マルチメッセンジャー天文学史を構築することができます。

このような活動を行う個人的な動機としては、当然ながら日本の天文学がどのように発展してきたか知りたいということがありました。太平洋戦争後、日本そのものと同様に日本の天文学は焼け野原状態から再出発しました。それが現在では日本の天文学者も観測装置も世界の第一線で活躍しています。どのようにしてここまで登り詰めたのか、これを知りたいというのが1つです。

もう1つは天文学や天文学者の人生を通して日本の社会を見てみたいということがありました。戦後から高度経済成長、バブル経済に至る日本の現代史は様々な形で語られてきました。一方、天文学者というものはいつの時代でも「ちょっと変わった人たち」です。天文学者の人生を追うことで、日本の現代史のこれまで語られなかった側面が見えてくるのではないかと、これがもう1つの動機です。シリーズ名が「昭和の天文学者たち」ではなく「天文学者たちの昭和」となっているのはそのような意味合いがあり、個人的にはむしろこちらの興味の方が大きいです。そのためインタビューでも、受けてきた教育や家庭環境、経済発展とともに変わっていく生活、研究者を取り巻く社会状況、戦前生まれの方には戦争体験など、天文学と直接関係ないようなことをたくさん聞いています。

本活動のインタビューでは、話者の方に詳細な資料を参照しながら慎重に語ってもらうのではなく、記憶を頼りにざっくりばらんにお話してもらっています。天文月報記事でもできるだけその方の語り口や言い回しを残すようにしているため、生き生きとして話者の人柄が伝わるような記事になっていると思います。しかし、人間には記憶違いもありますし、その場の勢いでつい誇張してしまうこともあるでしょう。記事にするときには人名・年号・事実関係などをできるだけチェッ



各インタビュー連載初回に、記事冒頭に掲載された近影写真。

左上から右に古在、西村、川口、杉本、小暮、海部、小平、佐藤、日江井。

クして本人への確認のもと修正しますが、チェックが難しい項目も多々あります。また、個人の主観や偏見・誤解も当然あります。これらは一見客観的事実ではなく歴史的資料とはならないと思われるかもしれませんが、ある立場の人がある出来事に関して、偏見であれ正論であれある意見を持つということは、それはそれでその人や時代を表す証言であると考えられます。もちろん、その偏見・誤解の内容が真実であると読者に受け取られないように注意する必要があります。

そういうわけで、このインタビュー記事を楽しんで読むだけなら全く問題はありますが、もし歴史資料として用いるときには注意が必要です。天文学でもある1つの波長帯の観測だけではノイズや系統誤差、較正ミス、パラメータ縮退などがあり天体の真の姿はわかりません。インタビュー記事に限らず、あらゆる資料はそれだけを信用せずに様々な資料と比較することが基本です。1つの出来事に対して複数の人の証言、公的資料、文献をあたることでその出来事を多面的に見ることができます。このあたりは日江井榮二郎氏の第10回(2026年1月号)でも話題になりましたので、ご参照ください。

### 3. プロセス

ここでは企画立案から記事作成までの具体的なプロセスをご紹介します。オーラルヒストリーそのものは歴史学の中で確立された方法論ですが、筆者は素人で見よう見まねで模索しながらやっていることをご了承ください。

#### 1. インタビュー対象者選定

まずテーマや問題意識を設定し、それに相応しい対象者を選定していくのが本来でしょうが、実際は全くそうではなく当初は行き当たりばったりでした。というのも、1920-30年代生まれの方々は筆者が大学院に入った頃にはすでに退職していたため、そもそも誰に話を聞いたらよいのかわからず、どのように連

絡を取ったらよいのかもわからないという状況でした。そのため、身近にいるシニアの方々にアドバイスや連絡先を聞いて、連絡を取って行きました。

#### 2. 準備

インタビューを引き受けていただけるとなったら、どのようなことを聞くのか考えるためにある程度下調べをします。筆者は物理出身であることもあり、1920-30年代生まれの天文学者の方々について失礼ながらほとんど存じ上げませんでした。前もって履歴書をいただいたりして出身地、学歴、指導教官、研究分野、職歴、公的な役職などをざっと調べます。それを元にどのような質問をするかを考えますが、20人以上インタビューして経験的にわかったことは、あまり下調べし過ぎない方がよいということでした。それは、こちらがあまり知らない方が話を聞いていて新鮮な驚きがあり、それが話者にも伝わるので話者もより積極的に話してくれるからです。

#### 3. インタビュー実施

インタビューは1回にだいたい2-3時間、2-3ヵ月に1回くらいのペースで行います。初回にまずこの活動の趣旨を改めて説明し、インタビューを録音すること、公表する際には原稿を加筆修正する機会があるのでこの場では何でもごっくばらんに話して欲しいことをお願いします。もう一つ重要なお願いは、若い読者にとって昭和の日本は別世界なので、自分としては当たり前でつまらない話でも読者には十分面白い話になり得る、だからとにかく何でも話してほしいということです。こちらからも細かいことを根掘り葉掘り聞いていきます。基本的小生まれの頃から退職後まで時系列で聞いていき、その後重要なトピックについて個別に詳しく伺います。そうするとインタビュー回数は1人5-10回程度、多い人では15回にもなりました。



古在氏へのインタビュー風景（2014年8月。撮影：吉田二美氏）。天文月報108巻6号掲載。

2-3 ヶ月に1回のペースだと、1人に2-3年程度かかることになります。筆者の場合、1人に聞き終わったら次の人というやり方ではなく複数人のインタビューを並行して進めています。ここ5年くらいは同時に5-6人を進めていて、色々な人の人生が頭の中でごちゃ混ぜになってしまうことがよくあります。

#### 4. 協力者・対談

たいていは筆者と話者の1対1でインタビューを行います。筆者と話者は専門分野も生きていた時代も違うので、筆者だけでは引き出せない話題がたくさんあります。そこで専門分野が近い協力者に同席していただいたり、ゲストと対談をしてもらったりすることがあります。機会がなくてまだ掲載できていませんが、古在・海部対談ほかたくさんの貴重な対談を行ってきました。唯一、佐藤文隆氏については天文月報記事が書籍化されることになり、荒船次郎氏、村木綏氏、橋本幸士氏それぞれとの対談が収録されています。

#### 5. 音声書き起こし

録音した音声の書き起こしは大変な作業で、人名や専門用語がたくさん出てきますし、できるだけ話者の語り口や言い回し、ニュアンスをそのまま再現したいので、基本的には一

言一句漏らさず書き起こす必要があります。だいたい1時間の作業で10分程度、慣れてくると15分程度の音声を書き起こすくらいのペースになります。初期の頃は業者をお願いしていましたが、予算不足のため最近では学生など身近な人に業者の半額くらいの謝金をお願いしています。最近ではAIによる音声書き起こしが可能になってきましたが、試してみたところ8割くらいの精度です。8割という精度が高いと思われるかもしれませんが、どの文にも2割間違いがあるので、結局全部聞き直して逐一直す必要があります。今のところ最初から人がやった方が速いです。

#### 6. 原稿編集

書き起こしが終わると天文月報用の原稿にまとめていきます。基本的にはインタビューに沿って時系列の記事にしていきます。皆さんだいたい理路整然とお話しされますが、時には話が飛んだり同じトピックが繰り返し出てきたり説明不足だったりするので、読みやすくするために整理します。また、人名・年号・専門用語などが正しいかもチェックします。編集も非常に地道で長い時間がかかる作業ですが、改めて話者と対話をしている気分になれるので楽しい作業でもあります。

#### 7. 話者によるチェック

出来上がった原稿は話者にチェックしてもらい、事実関係の間違いや意図通りになっていない部分などを修正してもらいます。ただ、明らかな間違いは修正してもらおうとしても、それ以外はあまり修正しないようお願いしています。冷静な状態で原稿を読むと、インタビュー中に勢いでしゃべったようなことはつい修正してしまいがちです。するとライブ感が失われてしまうだけでなく、当時の感情や価値観も抑えられてしまい、代わりに後患的で無難な言説になってしまいがちです。目的や話題によってはその方がいい場合もあ

りますが、本活動では多くの場合、インタビュー時の自然な語りの方を大事にしています。

#### 8. 原稿完成

話者によるフィードバックを受けて原稿が完成すると天文月報に投稿します。話者と専門分野が近い方を担当編集者にさせていただけることが多いので、専門的な部分のチェックでは大いに助けられています。

#### 9. 読者からのフィードバック

天文月報に掲載後、メールまたは直接に感想をいただいたり、時には間違いを指摘されたりすることがあります。明らかな間違いは後で訂正記事を出します。感想でも間違いの指摘でも、何かしらフィードバックがあると励みになりますのでぜひお願いします。

## 4. オーラルヒストリーが紡ぐ戦後日本天文学史

これまで、本活動では1920年代から1940年代の生まれの方々にお話を伺ってきました。これらの方々がどのような時代を生きたのかを概観するため、20世紀後半の日本の天文学を、主に観測装置の建設を軸に軽く振り返っておきます。

1. 戦後復興期: 1948年に礼文島で日米合同の日食観測が行われ、1949年には乗鞍コロナ観測所が建設されました。太陽研究では連続観測が重要ですが、アメリカ・ヨーロッパがカバーできない時間帯を日本がカバーすることで日本は国際的な舞台に復帰することができました。戦後の東京天文台については、1946年に東京天文台長に就任した萩原雄祐が1955年に書いた「天文臺復興の芽生え」をぜひお読みください[1]。

2. キャッチアップ期: 日本は1950年代半ばから約20年にわたる高度経済成長の時代に入ります。この間、1960年に岡山天体物理観測所に188 cm望遠鏡、1970年に三鷹に6 m

電波望遠鏡、1974年には木曾観測所にシュミット望遠鏡が完成し、日本の天文学は世界にキャッチアップしていきました。そして日本の天文学を世界レベルに引き上げる人材が育っていきます。

3. 飛躍期: その後、高度経済成長が終わり1980年代後半のバブル景気とその崩壊、失われた10年へと続いていきます。1981年に野辺山の45 m電波望遠鏡が建設され、1988年に東京大学東京天文台が国立天文台に改組し、1999年にすばる望遠鏡のファーストライトが実現しました。この時代には日本は世界の第一線に躍り出たと言えるでしょう。

先ほど「1920年代から1940年代の生まれの方々」と一口に書きましたが、世代により上記の3つの段階への関わり方は変わってきます。以下、大正～昭和初年代生まれと昭和10年代生まれに分けて、世代ごとにどのような立場で3つの段階に関わったかを概観します（カッコ内は掲載済みの方々）。

大正～昭和初年代生まれ（川口市郎・小暮智一・西村純・古在由秀・日江井榮二郎）の方々は高校生や大学生として終戦を迎えており、旧制高校や旧制大学で教育を受けました（日江井氏は新制大学1期生）。物心がついてから日中戦争・太平洋戦争に突入し、当時の雰囲気、疎開や空襲などの戦争体験を聞くことができました。彼らは戦後に天文学の道に進み、若手研究者として現場で汗を流して復興に取り組みました。萩原雄祐や仁科芳雄、荒木俊馬など、戦前から活躍し戦後の学界を指導した方達を直接知っているのはこの世代までです。キャッチアップ期には彼らは30-40代の中堅となり、観測装置や研究環境の近代化に取り組みます。そして飛躍期にはシニア研究者として学会やコミュニティの意思決定に関わり、日本の天文学を第一線へと引き上げました。

昭和10年代生まれ（杉本大一郎・小平桂一・佐藤文隆・海部宣男）の方々には終戦時に小学生も

しくはそれ以下の年齢で、新制大学で教育を受け、高度経済成長期に研究者の道に進みました。その頃には国内の研究体制が整い始めており、研究に専念できる環境にありました。そして飛躍期には30-40代の中堅で、日本の天文学が世界と肩を並べるための大きな推進力となりました。また、彼らの指導学生が、21世紀の日本の天文学を牽引していくこととなります。

お一人お一人の人生や経験も大変興味深いのですが、個々の人生の糸を束ね、日本の天文学史を編んでいくことがこの活動の目的です。インタビューは天文学で言えば観測、これまで掲載してきた記事は最低限の校正だけを行った速報のようなものです。そこからどのような歴史を紡ぐことができるかは今後の課題です。

1つの例として、戦後の日本天文学のマイルストーンの1つであるすばる望遠鏡の建設を取り上げてみます。すばる望遠鏡は言うまでもなく日本が世界に誇る望遠鏡で、数々の世界的な業績を上げました。後にすばる望遠鏡と呼ばれる次世代望遠鏡JNLT (Japan National Large Telescope) は、1980年ごろからコミュニティでの本格的な議論が始まり、1988年の国立天文台改組を経て1991年から建設が開始されました。これまで天文月報で掲載された方の中では古在氏、小暮氏、小平氏、海部氏がキーパーソンです。

古在氏は1981年に東京天文台長に就任し、国立天文台への改組後1994年まで台長を務めました。国立天文台への改組は当時の行政改革の大きな流れの中で起こったものでしたが、古在氏としてはすばる望遠鏡ほどの大規模な事業は東大の中の研究所ではやっていけないという思いがありました。古在氏はすばるを念頭に置きつつ改組について東京大学、文部省、水沢緯度観測所などと折衝し、すばるについては日本学術会議やコミュニティと対峙しました。

小暮氏は光学天文連絡会（現在の光学赤外線天文連絡会）の代表としてコミュニティの議論を取

りまとめ、東京天文台や日本学術会議との窓口になりました。東京天文台内部での議論がなかなか外部に見えてこないという歯痒さを感じていたということでした。

小平氏は当初はコミュニティの一員として次世代望遠鏡についてアンケート調査を行ったりサイト調査をしたりしました。国立天文台に改組するとすばる準備室に入り、予算獲得や海外での望遠鏡建設実現のための手続きに注力します。そして予算がつくと推進室長となり1994年からは台長として建設を推進しました。

海部氏は野辺山45 m電波望遠鏡の建設や運用の経験を買われ、小平氏を引き継いですばる建設の責任者となりました。そして様々な困難を乗り越えて1999年にファーストライト、2000年に共同利用観測開始を実現しました。

このようにすばる望遠鏡建設に様々な立場で関わった方々の証言が得られています。これらの証言から、すばる望遠鏡建設の意思決定・推進の過程について大まかな道筋が浮かび上がってきます。しかしこれで十分ではありません。すばる望遠鏡建設にはもっと多くの人たちが携わっており、この4人にはない視点があるはずで、さらなる証言を集めるとともに、他の文献資料を組み合わせることで、どのようにこの大きな事業が成し遂げられたのか、またそこからどのような教訓が得られるのかを考えていくことが今後重要となります。

## 5. まとめと展望

「シリーズ:天文学者たちの昭和」10周年ということで、これまで9人の方々の記事を掲載してきました。冒頭で述べたように、インタビュー自体は20人以上に行っており、まだ継続中の方々もいます。今後も記事の掲載やインタビューを続けていく予定です。

これまでの記事の話者は東京大学・国立天文台・京都大学の関係者がほとんどでした。しか

し、日本の天文学史をより立体的に描くには、それ以外の立場からの声も欠かせません。地方大学からは日本の天文学の発展はどのように見えていたのでしょうか？ また、戦後から数少ないながらも活躍していた女性研究者の視点では？ 研究者を支えた技官や事務職員、官僚の方のお話にも興味が出てきますね。実はこれらの方々にもインタビューを始めていますので、そのうちご披露できればと思います。

今のところ、この活動は筆者と少数の協力者による細々とした活動です。読者の皆さんの中で、様々な形で協力していただける方がいれば大変ありがたいです。どういう人にどういうことを聞けばよいか、アドバイスをいただけるだけでもありがたいです。一緒にインタビューをしてくれる人、原稿の編集を手伝っていただける人、これまでの証言をまとめたり分析してくれたりしていただける人、歓迎します。天文学と同じで、大変な作業ではありますがやりがいも大きいです。過去を共有することはコミュニティの維持拡大にとってとても重要なことです。今後も直接間接にサポートしていただければと思います。

最後に、これまでインタビューを引き受けていただいた方には深く感謝いたします。偉大な先輩方に何十時間もお話を聞けるとするのは筆者にとって素晴らしい経験でした。またインタビューに協力していただいた千葉庫三さん、小久保英一郎さん、浅井歩さんに感謝します。

## 参考文献

- [1] 萩原雄祐, 1955, 天文月報, 48, 11

### 10th Anniversary of “Series: Astronomers’ Showa”

Keitaro TAKAHASHI

*Faculty of Advanced Science and Technology,  
Kumamoto University, 2-39-1 Kurokami,  
Kumamoto 860-8555, Japan*

Abstract: The author has conducted interviews with retired astronomers, asking them not only about the development of astronomy but also about changes in education and society more broadly in the latter half of the twentieth century. Over the past ten years, these interviews have been published in *The Astronomical Herald* as a series entitled “Series: Astronomers’ Showa.” Fortunately, the series has been well received by readers, allowing it to continue over a long period. To mark the tenth anniversary of the series, this article revisits the nature of this undertaking and explains its aims, significance, and methodology. It also looks ahead to the kinds of historical narratives that may be woven from the testimonies of the interviewees.